大阪文化財センター調査報告ＸＸＩ

泉南郡阪南町鳥取地区埋蔵文化財
分布調査報告書

昭和５１年３月

財団法人　大阪文化財センター

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤三之雄

大阪文化財センターでは、昭和48年にも大正不動産株式会社の依頼で阪南町自然田地区の分布調査を実施するなど、当センターでは阪南町に限っても、すでに4件の分布調査を実施してまいりました。阪南町も近年の激しい和泉地方の開発の例外であり得ず、かかる事態は、文化財の行政的処理能力の低下をあるいはもたらしかねないものでありましょう。

従いまして、当センターが行う遺跡の有無の確認調査等といった事前的、基礎的調査は少なからぬ任を果していると自負するものです。

調査の実施にあたってはできるだけ遺跡の正確な実態を把握することを旨としておりますが、この報告書が遺跡保存の基礎史料としての任を果せば幸いです。

1976年3月

例　　言

1）本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、大正不動産株式会社の委託を受けて実施した泉南郡阪南町所在大正不動産株式会社開発予定地内の埋蔵文化財分布調査報告である。

2）調査は大阪文化財センター業務課調査室が担当し、室長、中西靖人、調査員、辻内義浩・国乗和雄が昭和50年7月14日から7月22日まで実施した。

3）調査に要した費用（280,000円）は全て大正不動産株式会社が負担した。

4）調査の実施にあたって藤田正篤氏からは当該地域における遺物散地の教示、案内を受け、採集遺物の提供を受けるなど、多大な援助、協力を受けた。記して謝意を表す。

5）本報告の執筆は第1を中西靖人、2．、3章を辻内義浩があたり、4章及び遺物実測は普及資料室長福岡澄男氏の手をわずらわした。

目　次

はしがき

例　言

〔Ⅰ〕調査に至る経過……1

〔Ⅱ〕位置と環境……1

〔Ⅲ〕調査の結果……3

〔Ⅳ〕採集遺物……4

図版目次

図版一　周辺の遺跡分布図

図版二　踏査地域及び遺跡分布図

図版三　踏査地遠景、踏査地区内祠

図版四　サヌカト散布地、サヌカイト散布地

図版五　採集遺物

図版六　採集遺物

図版七　阪南町各地採集石器実測図

挿図目次

第１図　玉田山採集石器実測図

第２図　東鳥取町平野山長楽寺採集一五輪塔（地輪）

第３図　三味谷池遺跡採集遺物（藤田正篤氏採集蔵）

第４図　蓮池遺跡採集遺物（藤田正篤氏蔵）

〔Ⅰ〕調査に至る経過

昭和50年7月、大阪府泉南郡阪南町鳥取303番地他181筆の宅地開発を計画した大正不動産株式会社は、当該計画地内に埋蔵文化財が存在するか否かの分布調査を、昭和50年7月8日付で直接財団法人大阪文化財センターへ依頼した。依頼を受けた財団法人大阪文化財センターは、その調査の重要性に鑑み、大正不動産株式会社へ、関係行政機関への依頼を先に提出するよう求めた。これを受けて、大正不動産株式会社は同日、再度、阪南町教育委員会及び大阪府教育委員会に対して分布調査の依頼を提出したのである。

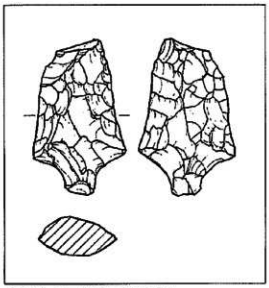
この依頼を受けた大阪府教育委員会は、同月22日、阪南町教育委員会を経由して大正不動産株式会社に対し、分布調査を実施する必要性があること、及び当該調査は財団法人大阪文化財センターが実施するのが適当であることを回答した。

ここにおいて、財団法人大阪文化財センターと大正不動産株式会社は、経費等について協議をしたのち、調査の受託契約を締結し、実際の調査に着手したのである。

〔Ⅱ〕位置と環境

大阪湾にそって細長く続く和泉平野が、大阪湾に向ってせり出した和泉山脈によって遮えぎられるあたりが阪南町である。男里川は和泉山脈の山間を流れる金熊寺川、菟砥川、山中川、井関川等の流れを集め大阪湾へ注いでいる。この川は現在泉南市と阪南町の境界をなし、右岸には尾崎、黒田、石田、少し南へ下って鳥取の荘の集落が並び、これらの集落の南方には標高100m前後の低い丘陵が続き、和泉山脈の分水嶺に連なっている。分布調査の対象地域は井関川の北方に低く連なる丘陵が平野部につき出した突端部に位置している。南海本線鳥取ノ荘駅の南方国道26号線のすぐ南から芋ケ阪池に至る南北に長い地域

で三昧谷池の周辺に若干の水田がある他は全て丘陵である。調査対象地域の中央部に位置している三升五合山は標高115m であるが、この丘陵は木々の間からは大阪湾を真近に望む影勝の地である。調査対象地区の西側に隣接する地は、すでに山は削られ宅造が完成している。又東側隣接地もゴルフ場が完成しており、周辺地域は旧状を失いつつある現状である。



第1図　玉田山採集石器実測図

近年和泉地方の低い丘陵地帯より旧石器の発見が相次いでいるが、阪南町でも昭和36年菟砥川右岸にある玉田山古墳の発掘調査の際墳丘中より(注1)、昭和48年には玉田山南方の山中よりいずれもポイントが発見されている（注2)。

縄文時代遺跡は井関川と菟砥川が丘陵部を抜けて平野部にさしかかるあたりの丘陵縁辺部に並んで、東側より順に玉田山遺跡、寺田山遺跡、岩崎山遺跡、石田山遺跡がある。弥生時代遺跡は男里川右岸に双子池遺跡、雄里遺跡がある。山中川右岸の雨山遺跡も知られていたが、宅造ですでに消滅している。古墳時代遺跡は丘陵部に塚谷古墳群、玉田山古墳群等があり、平野部では四田池古墳、天神の森遺跡が知られている。

第2図　東鳥取町平野山長楽寺採集一五輪塔（地輪）

調査対象地周辺部の遺跡分布は以上の如くであるが、調査対象地の東方の丘陵縁辺部に旧石器、縄文時代遺跡が集中するのが注目される。又近世墓地であるが平野山長楽寺跡より一石五輪塔断片等が採集されており、墓地資料としてあげておく。

注1，玉田山古墳発掘調査団『玉田山古墳発掘調査概要』昭和36年
注2，大阪文化財センター『大阪府泉南郡阪南町自然田地区埋蔵文化財分布調査報告書』
昭和48年

〔Ⅲ〕調査の結果

1班4人編成で尾根筋を中心に3～4m巾で、水田地域は畔を中心に踏査した。その結果、当該地域内に於ける埋蔵文化財包蔵地としてはすでに泉佐野市在中の藤田正篤氏の発見になる三味谷池遺跡、三升五合山遺跡の他に加えるべき成果は得られなかった。

1．三升五合山遺跡

この遺跡は藤田氏によって発見されたものであり、氏に案内を乞い、現地を踏査したがその際はサヌカイトの細片を数点採集したのみで、3章に記した遺物はすべて藤田氏より提供していただいたものである。サヌカイト散布地は三升五合山の北西100m附近、標高約100mの尾根上に拡がっている。この地点は北に向ってのびる舌状丘陵の分岐点にあたり、尾根は若干であるがせまい平担地をなしている。しかし、散布地は大正不動産所有地の境界真近かに当り、一部は南海団地の造成で削べきれている。

2．三味谷池遺跡

調査対象地区の南端部近くに溜池がある。この池は三味谷池と呼ばれ丘陵縁辺部を掘り込み、その土で南方部に堰堤を築いたと思われる。この池中より後述する遺物が藤田正篤氏によって採集されている。近年三味谷池を埋立て、運動場を造成する際発掘調査がなされたと聞くが詳報に接していない。又三味谷池上方の丘陵平担地より五輪塔の空輪断片と思われる石材を採集したが、このすぐ上に江戸時代の記銘をもつ石塔の建つ墓地があり三味谷池上方にも中近世墓地があった可能性もある。

3．蓮池遺跡

この遺跡も藤田氏によって発見されたものである、蓮池は調査対象地域から

はずれるが、関連する遺跡としてあげた。この池も丘陵縁辺部をカットし、その土を南、および東の低地部の堰堤となしたと思われるものである。従って、かつては三升五合山より張り出した舌状丘陵は低まりながら蓮池にまで突き出ていたものであろう。従って旧石器、縄文遺跡は壊された尾根上にあったことも考えられるものであり、遺跡が調査地区内にも遺跡が在する可能性も十分考えられる。

〔Ⅳ〕採集遺物

調査区域内および隣接地で、我々の踏査以前に発見されている遺跡、遺物に次のようなものがある。これはいずれも藤田正篤氏の踏査によって発見されたものである。遺跡の立地等については前章までに記しているので、ここでは遺物を中心に簡単な説明を加えることにする。①

1．三升五合山遺跡の遺物

石　器（図版第5.7－3，10，12）

石器はいずれもサヌカイト製で、3は石鏃の尖端部のみを残す。重さ0.05g、10は左右にあまりのびない十字形をなす、丹念な加工をほどこした石鏃で、ほぼ原形を残している。断面は厚く、重さ1.25g をはかる。12は一端の両側を両面加工し、尖頭部をつくり出しているが、一方の端部には自然面を残している。片側は深く剝離して全体の形は左右対称形になっていない。重さ8.55g。これら石器の他に約30片のサヌカイト小片が採集されている。

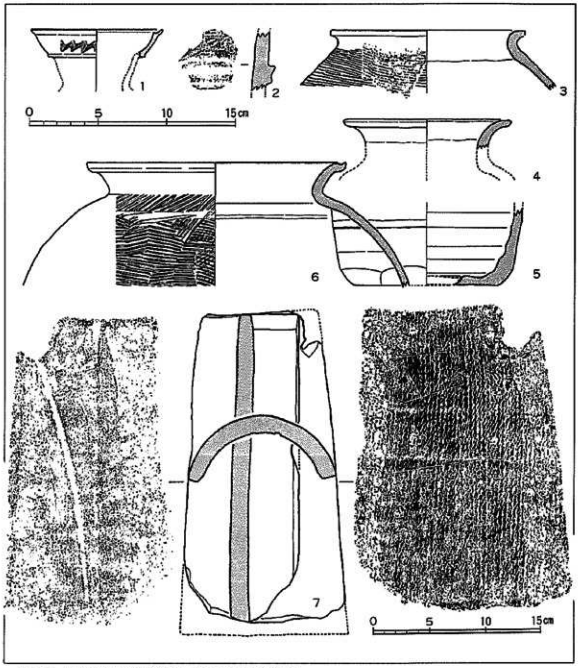
2．三味谷池遺跡の遺物

石　器（図版5.7－1，6，9）

石器はすべてサヌカイト製で、1はやや小型の凹基式の石鏃で尖端部をわずかに欠失している。表面はかなり風化している。重さ0.35g。6は凸基式の、扁平でやや大型の石鏃で薄く大きな剝離がみられる。尖端部を欠失しており、現重量2.5gをはかる。9は小さな剝片の片面の一部にだけ二次加工を加えた痕がみられるもので、あれいは錐として使用されたものとも思われる。重さ0.45g。

埴　輪（図版６－２，第３図－２）

１片のみであるが、須恵質円筒埴輪の小片が採集されている。一部に斜目および横方向の叩き目が認められる。突帯の様子などは、５世紀後半の築造になるとみられる、泉南郡淡輪所在の西陵古墳の埴輪に類似している。



第３図　三昧谷池遺跡採集遺物（藤田正篤氏採集蔵）

土　器（図版６－１，２，７～15　第３図－１，３～６）

前記の埴輪とほぼ同時期とみられる須恵器壺（第３図－１）の他、古墳、奈

良、平安各時代の須恵器がある。(第３図－６）は外面に、かなり整然とした平行叩きを残し、内面は丁寧にナデ仕上げした、堅緻な焼きの甕で、平安時代の所産と考えられるものである。その他の土器では灰釉壺の小片が１片みられるほか、常滑大甕小片、平安時代に属する常滑三筋壺の口縁部かとみられるもの、（第３図－４）、備前壺かとみられる小片など、平安時代以降、中世硬質陶器類若干、鎌倉時代に属するとみられる、土師質で外面は平行叩きをほどこし、いぶして瓦質化した軟質陶器甕（第３図－３）等がある。

古　瓦（第３図－７）

行基葺きの丸瓦が１点みられる。凹面には布目を残し、凸面には縄目叩きを行なった後、ナデを加えているほか、凹面端部は面取りしている。焼成はやや軟質である。②

他に藤田正篤氏の踏査の折、石製五輪塔、一石五輪塔片などが遺跡地に散乱していることが確認されている。

以上の採集遺物を概観すると、奈良時代以前から、石器、土器など若干ながらも人間の営みの痕跡を残していることがまずしられる。つぎに一片のみの採集であり、古墳の所在等を云々するには不十分というほかはないが、埴輪片の存在も注目されるところである。

採集品の中で比較的多くみられるのは、平安時代以降、中世にかかわる遺物である。それらは常滑や備前など中世の著名大古窯の製品を含んで、産地を同定できない硬質陶器と、畿内および隣接地域の産とみられる、表面が瓦質化した軟質陶器とからなる。断片的な表面採集遺物であるので、詳細な議論はできないが、これらの中世陶器類の中に瀬戸産の施釉陶、中国製の陶、磁器類が含まれていないのは、この遺跡の一つの傾向として指摘できるように思われる。また石造五輪塔片などの所在が確認されていること、あるいは「三味谷」の名が遺存していることは、この地がある時期、墓地として利用されていたことを示すが、先述の陶器類の殆んどが壺、甕の類で、日常汁器の中で多くを占める、碗、皿類、あるいはすり鉢等がみられないこと、壺、甕等が往々、火葬骨蔵器として使用されていることを考慮した時、墓地の成立時期をすくなくとも平安

末期にまで遡らせることが可能となってくるであろう。その場合、中国製陶磁器などがみられないという先述の傾向が注目されることとなる。近年の中世墓地発掘調査のデータは、比較的近接して所在し、時期的にも同じ頃に形成されたものであっても、墓地によって、中国製陶磁器や上物の国産施釉陶器を骨蔵器等に使用している場合と、逆にそれらを殆んど使用していない場合があることを教えているが、和泉地方においても、岸和田市上松中世墓地の発掘調査において、多量の中国製青磁碗等が検出されていることでもあり、彼我の比較をはじめ、今後の調査、検討を要する部分があるように思われる。

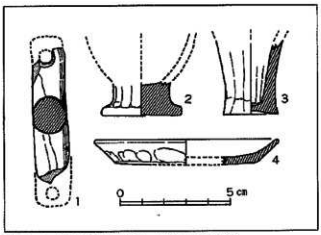
3．蓮池遺跡採集の遺物

石　器（図版5．7－2，4，5，7，8，11，13）

石器はすべてサヌカイト製で、2，4，5は通有の凹基式の石鏃であり、いずれも端部を欠失して、表面はかなり風化している。重さはそれぞれ0.5g、0.3g、1.25g、をはかる。8は一端に両側から二次加工を加え、尖頭を作りだしており、鏃あるいは錐として使用されたものと思われるが尖端部を欠失している。重さ2.5g。11は一方に打面を残す剝片の、他方の両面に、連続的に小さな剝離を加えて刃部としている。全体の形は不定形な石器である。重さ31.35g、13は自然面の打面を残す横長の剝片を用いて、打面と反対側の辺の両面に二次加工を行ない刃部としているほか、一端にはつまみを作り出している。重さ16.75g。7は茎を作り出した、扁平な尖頭器であり、重さ6.2gをはかる。両面に縁辺から中央に向って、細く長くのびた丁寧な押圧剝離の痕がみられる。一面は中央部に、剝離されきらずに残った、若干部分の自然面がみられる。この石器にみられる形態、技法は、縄文、弥生時代に通有の石鏃とは異なるものであり、有舌尖頭器と呼ばれる石器に含め得るであろう。その場合、断片的資料ではあるが、この石器の存在は蓮池遺跡の時代を、縄文時代草創期にまで遡上させることになり、和泉では現在稀有な古い遺跡の一つに加えることになるのである。最近、堺市野々井遺跡、高石市大園遺跡、和泉市寺門遺跡、岸和田市西山遺跡、同琴山遺跡など、和泉各地であいつぎ、有舌尖頭器やナイフ形石器が発見されていることを想えば、それらの各遺跡をつなぐことにより、和泉にお③

ける旧石器時代の人間の狩猟採集活動の範囲やルートを想定できる日もそれほど遠くないように思われる。なお、蓮池遺跡では他にサヌカイト片50片以上、チャート片2片がみられる。

土　器（図版6－3～6、第4図－1～4）



第4図　蓮池遺跡採集遺物（藤田正篤氏蔵）

いずれもよく磨滅した小片になっているが弥生時代中期に属するものが数片みられる。先述の石器中にもこの時代に対応するものがあり、小規模ながら定住村落がこの時期にはじまったことがうかがわれる。古墳時代以降のものでは、6、7世紀および、奈良時代に属する8世紀代の須恵器が、各々数片みられる。中世に属するものでは瓦器小皿や土釜が数片、瓦小片数片がみられ、三味谷池遺跡の遺物群との関連で興味がもたれる。その他の遺物では両端に孔をもつ土師質土錘、製塩土器片がある。製塩土器は底部をわずかに残す小片でよく磨滅しているが、わずかに指で押えた成形痕跡がうかがわれるほか、もろく赤変しており、火中したことが明白である。海岸から1km以上離れたこの遺跡で製塩土器がみられることは、河内長野市高向をはじめ、内陸部でも点々と製塩土器が発見されている事実を想起させ、この種の土器の使用、移動について検討する材料を与えることとなるであろう。④

①今回、藤田正篤氏の好意により、同氏採集の遺物を実測、撮影し、本報告書に掲載のはこびとなった。

②藤澤一夫氏から、藤原期の瓦であろうとの教示を得た。

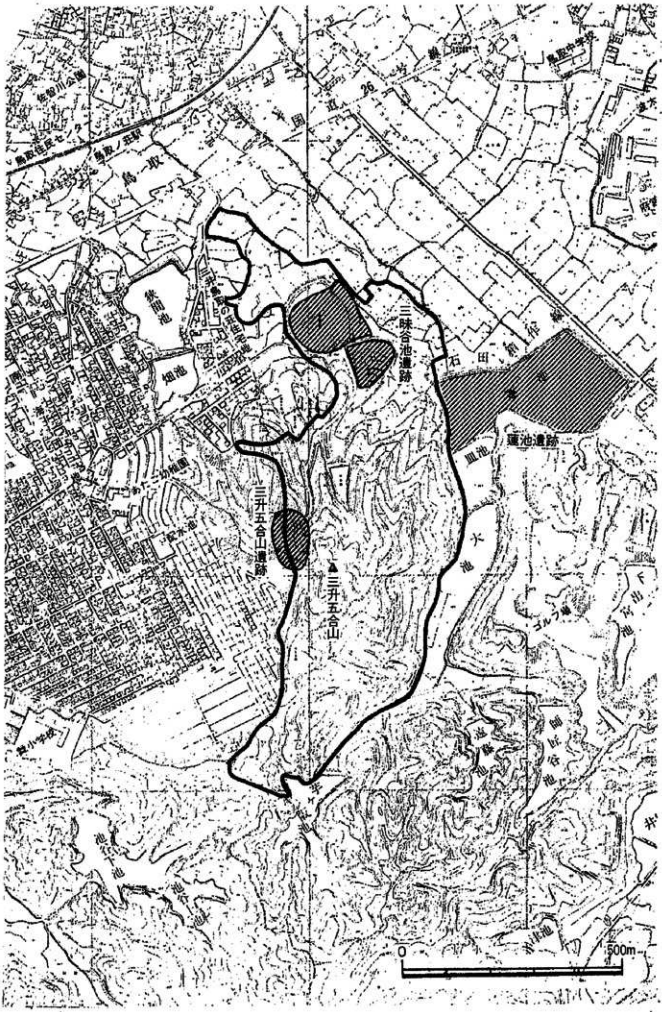
③大園遺跡出土の石器は、（『大園遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会1975年）中に図版が掲載されている。西山、琴山両遺跡の石器は玉谷哲氏にによって採集され、近々発表される予定である。

④河内長野市高向出土の製塩土器は、（『主要地方道枚方、富田林、泉佐野線バ

イパス（大阪外環状線）予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』（財）大阪文化財センター、1973年）中に図版が掲載されている。他に例えば著名なものでは、柏原市船橋遺跡（田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真『船橋遺跡の遺物の研究』平安学園考古学クラブ、1958年）日下遺跡（堅田直『東大阪市日下遺跡調査概要』帝塚山大学考古学研究室、1967年）などがある。

図版一　周辺の遺跡分布図

図版二　踏査地域及び遺跡分布図

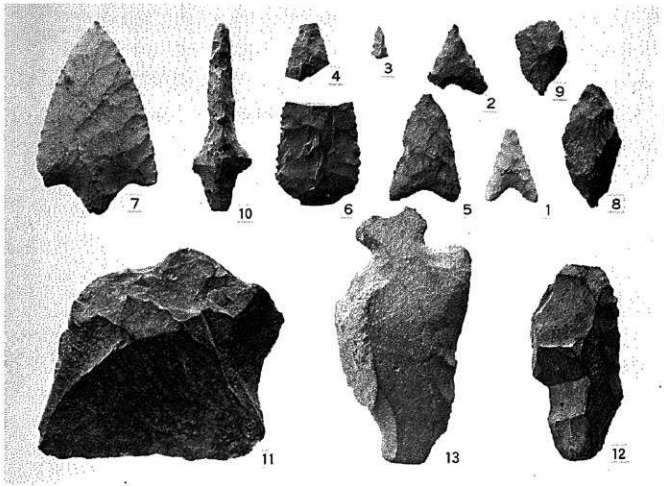


踏査地遠景（北方より五升五合山方向を望む）

踏査地区内祠

サヌカト散布地（東南より望む）

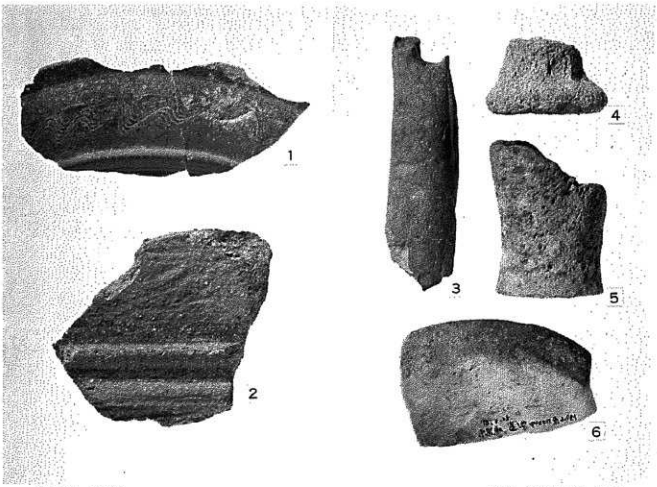
サヌカイト散布地（東南より望む）



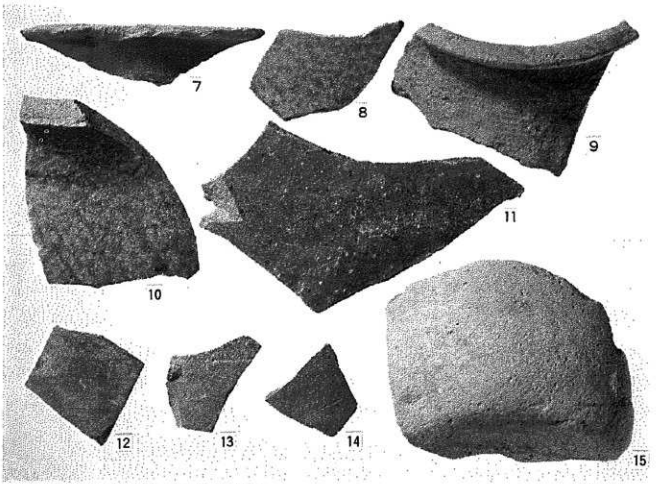
▲石器類

▼同裏面

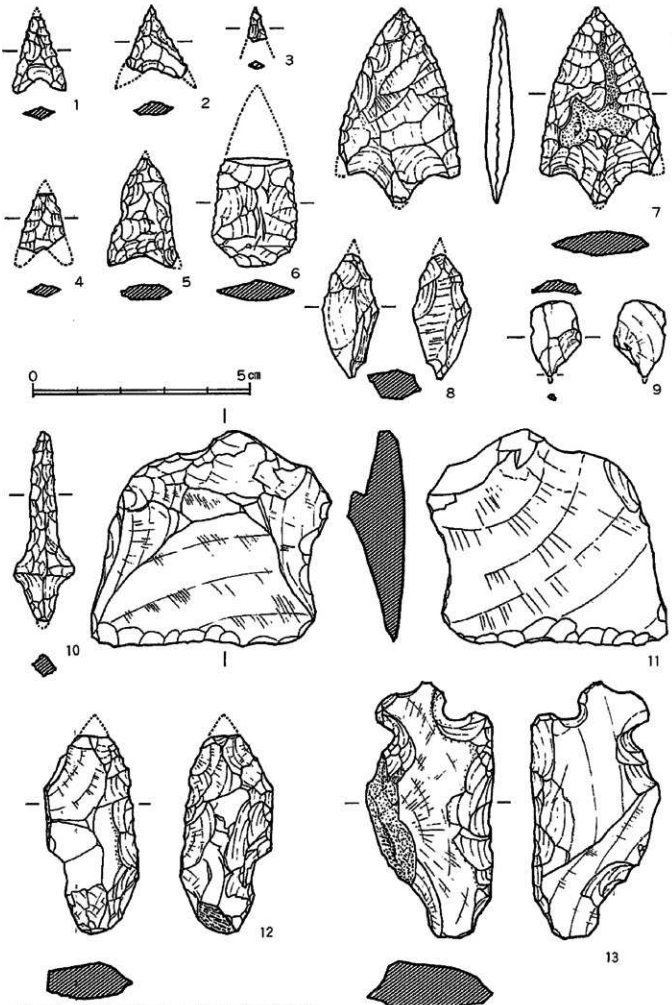
1, 6, 9, 三昧谷池遺跡　2, 4, 5, 7, 8, 11, 13堰池遺跡　3, 10, 12三升五合山遺跡



須恵器　埴輪　　土錘、製塩土器、瓦器



1，2，7～15三昧谷池遺跡　3～6蓮池遺跡　　陶器類



阪南町各地採集石器実測図（藤田正篤氏採集蔵）
1，6，9三昧谷池遺跡　2，4，5，7，8，11，13運池遺跡　3，10，12三升五合山遺跡

財 団 法 人
大阪府[illegible]
第
(04572)

大阪文化財センター調査報告集Ⅲ
文 化 財 調 査 報 告 集 '75

昭和51年5月1日発行

著 者 大阪市東区大手前之町
財団法人 大阪文化財センター調査室

発行者 大阪市東区大手前之町
財団法人 大阪文化財センター

印刷者 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市北区川崎町38番地
ナニワ印刷株式会社

大阪市浪速区恵美須町[illegible]丁目1-172
株式会社 ひかり工房

大阪文化財センター
蔵書
第 3387 号